ヌ-59

あんか火

紅錄作

258
4
805

特52
343

あん火

奥州は津軽の城下に、名高い七夕の俟武多祭が濟んで門に火を焚く盆の頃になると、林檎が其れ〳〵に美くしい色を染め出す。地福村といふのは弘前の町から半町ばかり西南の小さな村で、遠く館野の方から見ると只たゞ柿の林檎畠。特に朝の靜かな眺めは格別なもので、薄く白い霧の中に包まれた一廓は滑かな葉を瀰る紅、黄、紫などの林檎の色に、恰ら朧の中の五色の繪を見るやうな氣がする。其の朧の片端れから更に色濃き朧の煙が、もや〳〵と心ありげに立騰る、其れが其地福村三十戸の竈から吐き出

昭和
47 2 22
内交

す朝の息である。と聽て竹螺の聲が西の丘から聞ゆる。

竹螺を吹くのは此の畠主の佐吾十爺で、彼が此村を起してから二十年餘、

あ　朝と正午と夕方と一日も休んだ事がない。此音が聞ゆると畠の中は荷車の音、牛の吼ゆる聲、梯子の上で林檎を捥ぐ鼻唄、草拔の女共が和解なしに笑ふ聲など、急に賑かになつて、朝日の活々とした力が木となく葉となく、

ん　土となく流れ渡る。

いつも佐吾十は其岩盤な銅色の大きな左の拳を少し曲がつた腰の後ろに

火　當てがい、左手に竹螺を持て家を出ると、兩側の疏水の溝が堀てある適宜に廣い畠中の路の眞中に、大きな林檎の古木が、此畑の王樣ともいふ樣に枝を張て居る。古木の太さが一抱許で、六尺程上から二股に裂けて棚の上に枝を卸はし、幹の肌は二十年間風雨と戰つた衰へを示して一體に蝕んだやうになつて居るが、四方三間餘りに擴がつた梢は未だ生々として「なに小僧共に負けるものか」と言たやうに青い葉の間から美人の頰のやうな若い色の實を勢よく列ねて居る。佐吾十の往復ともに、此の古木の下で一

あ　休憩をするのが例になつてるので、石油箱二つに板を渡した腰掛に花莫蓙が敷かれてある。

ん　機嫌の好い時には、此處に若い者を集めて爺さんは餘り上手もない聲で、

「骨が粉になりや粉が骨になる汗は重たい金になる」と唄ふのであるが、

火　迂濶油斷をすると、其れから直ぐに身の上話を始められるので、慣れたものは唄が濟むと、

「あんと巧ねもんでごすな」と賞め捨てゝ颯々と逃げて了ふのだが、氣の利かないものは大抵爺さんに白羽の矢を立てられる。

「汝等あはあ、此唄の譯は知んめねが、あんでもはあ働かんにや婆婆の飯あ食ねねだ俺あ見ろよ、此年ではあ四十二の厄年から」と丁寧に指を折て、

あ

「今年で六十五だもんで、二十三年の間でこれ丈の仕上を爲るにや骨よ粉にしただ、其粉がはあ骨になつただ」

ん

といふを冒頭に長々しい自慢話に取掛るので、若者の中には爺さんの話の前提から大尾まで一句も漏らさず暗記して居るものもあるので、

火

「其りやもう此間も聞て知つてるだよ」

と言ふものがあると、爺さん急に不興顔になつて、

「其んねねに知つて だあら、あんで怠けくさるだ、はあ今の若ね者あ年寄べいだ思つてどん底に聞かねねだから籠の殖ねべい理窟あ無ねだ」と再

び本題に絢を戻すので、近頃は相成べくは此の大林檎の下を避ける樣にして居る。

あ

此の大林檎といふのは爺さん半生の紀念樹で、爺が人の馬を曳いて歩いて居た時、弘前の町で西洋人が喰ひ捨てゝ行た林檎を拾つて其種子を植ゑて見たのが抑々の濫觴、其時は西洋林檎といふものが殆んど絶無であつたので、實植ゑから接木、其れから其れと瞬く間に殖ねて、今では津輕の名

ん

產になつた、其名產の母とも言ふべき木は此れなので、彼は此木に自分の姓の地福といふ名を付けた。

火

實際佐吾十が地福の下に腰を下した時は、老勇士が其の瘢痕を撫つて昔の戰を偲ぶ其れと同じ樣な氣持で、當時の苦しかつた事悲しかつた事を想出す度に、今の自分がいつの間にか昔の自分となり、其の昔の自分が最後

に今の自分に復る一瞬間の覺醒際に得も言はれぬ快味を感ずる、其れが又た誰かが相手となつて回顧談の矢面に立て呉れた時には爺は獨りでは想出し得ぬ微細い事まで自づと口から迸り出るのだが、今日は一人も相手がないので雲時此處に休んで、其れから西の丘に登ると、夕日は松原の上を一尺許り離れて、一日の勞働から安息に歸る靜かな光を眼に眩ゆくない程に畠の上に拋げて居る、此れが佐吾十の最も得意な時で、其の懷襟に撒がる一望の畠を綏くりと見渡し、扨て腰から煙草入を取出して、掌に灰殼をはたき〳〵四五服喫み續けると澄み切た青空を背後に眞直に立つて例の竹螺を吹出した。と畠の隅々、木々の蔭から三々五々、人影が現はれて、鍬を肩にするもの、車を推すもの、梯子を擔ぐもの、籠、笊、叺などを運ぶもの、其等が一同に牛小屋に近い井戸の邊りに集まつて、手ん手に足を洗ひ、

農具を片付けなどするので、鷄や犬までが賑かさに引かされて嬉しさうに雜踏の中を跳廻る。此等の有樣を忸と見下して佐吾十は丁度一國の帝王にでもなつた樣な氣持に、其の深く刻んだ額の皺から洩るゝ明壯とした眼を優しい光りに潤まして嬶て丘を下りた。

「れう黑牛よ、あんではあ吼ねるだよ」

と佐吾十が聲を懸けると、牛小屋の前で秣を切て居た與茂作爺が手を休めて。

「あんだか知んねねだが、がら吼ねけづかつて物う食はねねでがすよ、あのう眼う見て呉れつへいや」

「陽氣の中症ぢやあんめねかなあ、こらあ黑よ、主あ切ねねかよ」

「切なかんべいや、頤たあ泥に浸けてるだあもの」

「れいよ、切なかんべいなあ黒」
と佐吾十は奥の方を向いて、
「れうい、鶴公居ねいかな、れうい鶴公やあい」と叫ぶ、遙かの木の茂みから、
あ
「れうい」と應へる。軈て出て來たのは年頃二十前後の色の白い、額丈け
ん
薄く日に焦けた、何處かに氣の利いた處のある若者で、洗濯下ろしの白い
褄衣に萌黄めりんすの兵子帶を後ろに結んで、半股引の下からくつきりと
火
した脛が氣持よく締つて見える、五分刈の頭に阿彌陀に被つた麥藁帽を取
つて一寸會釋をすると節は、
「主あ草臥れたべいがな、黒牛があんだか鹽梅が悪いでの、一返床あ洗つ
てやつて見て呉れろよ」と言ひ捨てゝ此處を出ると、今しも稼ぎから歸た

許りの馬の一群が繋いである、佐吾十は又た是に聲を懸ける、
「れう芦よ、大儀だつたべゑや、れう青よ、赤よ、耳長よ、瘤よ、皆んな
御苦勞だのう」
あ
といふて畠の中に入ると、其處に秋桃や梨や、榲桲が、靜かに風の末葉
ん
を戰がして居るので、節は是にも聲を懸ける、
「皆な早く大きくなれやのう、實い生るやうになつたら好い肥料をやるべ
いよ」
火
と一々に言ふのが此節の癖なので。
今までの騒々しさが、ひたと止んで、四邊が急に靜かになると、畠中の
林檎の香が夕暮の乾いた空氣を搖かして、ほつと暖かいやうな氣持に流れ
渡る。此間を佐吾十は横顔の皺々を夕日に照られて、後ろ手を組みながら、

のこり〳〵と歩いて來たが、呼止めるものがあるので、振返て見ると其れは牛番の與茂爺であつた。與茂爺は佐吾十と同じ年配であるが、佐吾十に比べると五つ六つ程多い樣に見ねる。

あ「床あ洗つただかな」と佐吾十の方から聲を懸けると、一寸腰を屈めて、

「洗つただ、洗つただがな、黑の野郎あんともはあ、癒らねねだ」

ん「其んねねに早癒るもんでねねだよ」

「其うだんべいかな」と横の方を向いて。

火「其んで旦那、ちよつこら相談のうあるだで」

と佐吾十の歩き出す背後に從いて行く、

「はあ何んだ」

「他事でも無ねだが、又た一軒殖やさんにやならねねだ」と黑い顏から白い齒を露出して笑つた。

「はあ誰だ」と佐吾十も笑ふ。

「新太の奴だがの、何んでも今の若い者あ敏捷ねもんだ、かよ子と何時んあ間に出來たかな、もう五月だあによ、俺あ打魂消だよ」

「彼奴あ仕事う働くでの、兎だら樣に跳廻るだから、俺あ愛がつてやつたんだが、もう女娘の尻窺つただかね、其んだら早く家拵へさつせい」といふ火中に、例の地福の下に來たので、花莫蓙に腰を下した。一體佐吾十は氣が短い代りに又よく人に情けを懸けるので、自分の姓を名づけた地福村といふのは、佐吾十の畠に働く若い男と若い女と好いた同士には直ぐに世帶を持たす、家を建てゝやる、長年の中には馬の一匹や田の一枚も與れてやる、其れが今では二十組餘りも出來て、新らしい組が見付かり次第に與茂作が

一切の世話係り、佐吾十に申込むといふ事になつて居るので、佐吾十は其戸數の殖えるのを喜んで居る。

「俺ゐ死んだら出雲の神様に褒められるだんべい」と何かにつけて言ふたものでの。

あ

與茂作が去つて了ふと爺は續けざまに煙草を吹いて居たが、急に思ひ出した樣に、

ん

「れ福よ、れ福やあい」と呼んだ。

爺は朝から晩まで寸時も落着いて居ない、眼の覺めて居る間は用事の有る無しに拘はらず人を呼んで居るので、其れが十五六年前に、女房に死なれてから一層烈しくなつて、其中に最も多く呼ばれるのはれ福である。

火

れ福の素性は誰も知てるものがない、死んだ女房が何處からか貰て來た

といふが、拾つたのだらうと言ふものもある、丁度れ福が二歳の時で、其れから間もなく婆さんが死んだので、子もなく孫もない佐吾十は男手一つに育て上げた、這へば立て立てば歩めと段々生長くなればなる程爺さんの可愛がり樣は一通りでなく、明けても暮れてもれ福をば自分の側から離した事がない、彼は甚麽に腹を立てゝ居る時でも、れ福の顏を見ると直ぐ顏の皺が弛んで了ふので。

あ

ん

加之佐吾十はれ福の乳呑の時から十七歳になる今まで、今だにれ福を抱て寢てるので、村の者が、

火

『旦那、れ福さあも既ういゝ女娘盛りになつただに』といふものがあると、彼はいつも機嫌よく笑つて、

「こりや俺がの行火だでのう、ねらあ足が暖まるだ」といふ、是れが原因

になつて村中ではれ福に「あんくわ」と綽名を付けた。

「れ福やのう」

と爺は林檎の木間から此方へ來る姿を見付けて呼んだ。

あ　桃色の襟を取た白い袖無しから、肉付の宜いむづ〳〵とした白い腕を出して、脇口からふつくりと膨らんだ乳が仄かに見ゑる、腰から下は赤い腰

ん　卷一つで紙緒の草履を埃の中に曳きながら出て來たのはれ福である。

「何んだし」と爺の前に立つ、同時に口の酸漿がぶうと鳴る。

火　「何んで草履穿いてるだよ、下駄あるだに」

と爺は笑ひたさうに目と口元の皺を寄せて、

「若ゑ女娘だらいふもの、其んだ埃だらけになるで無ゑよ」

と顔を見詰める、

「其んでも、下駄穿いたら惡くなりしによ」

と夕燒の雲に其の美味さうな頰を薄紅く照られて、再びぶうと酸漿を吹く。

あ　「惡くなつたら買てやるべいに、足よ怪我したら奈何しる積だ」

「下駄あたら欲しく無ゑによ」

ん　「何が欲しいだ」

「何んでも」

火　「何だよ」

「笑うだもの」

「笑はねゑによ」

「うんだら」

「ろんだら何だ」
「あのう何に」
「あのう何に」
あ　「は～～～」とれ福は大きく口を開いて轉げる樣に笑ひ出した。
「同じ事言ふだによ爺さん」
ん　爺も同じく笑ひ出して、
「はあれ、汝から笑つたで無いかの、ろんでは家さ這入つてから聞くべい
火　やのう」
と、爺が先になつて家近く來たが、又考へ出して、
「れ福よう」
「あんだし」

「あのう、黒牛が鹽梅惡いでの、忘れた事しただ、鹽う食はせりや癒るだ
あに、汝ちよつくら行て鹽やつて來いよ」
「牛小屋しけね」とれ福は言捨てゝ其方へ足を向けた。
あ　「れ福よう」
と何か又思ひ出して言た時、れ福の影が、向ふの百合畠の中に穩れて了
ん　つた。
「早ね足だのう」
火　と爺はにや～～笑て家の方を向いた。
日は全く沈んだけれども、西の空の夕燒は凡ての林檎の上を彩つて、御
光のやうに薄雲を抹すと、柿の木の梢高く突出た風見鴉か、恰ら詩の中に
浮き出た樣で、渾然とした奥州の眠れる如き天は底の方から靜かに薄紫、

赭、水色に變り行く中に、軈て末廣がりに綿を千截つたやうな小さな白い雲が、龍の鱗の如く靑地の上に撒かれた。

「鰯が取れるだんべいよ」

と言て見たが、家の中は何の音もなく、椽側の鷄が二三羽、遠慮會釋もなく上り込んで居る、灯ともすに早い奥の間を淋しさうに覗いて、爺は、對手が欲しいといつた風に四邊を見廻した、遙かに黑牛の吼ゐる聲がする。

で、爺は椽側から腰を放すと、手籠を持て木間を歩きがてら、薄明りに見ゐる目の力を便りに、落ちた林擒を拾ひ溜めた。

籠が張りきれる程に積込んだ頃、爺は何時の間にか畠の南端、雜木林近い秣小屋に近く來た事に氣が付いた。其處には溝を引いた水門があつて、

其れが垣根の外に音たてゝ落る。伐り倒した許の材木や冬構に使ふ杉皮の束や、跛になつた唐箕や、古ぼけた水車や挽臼など、秩序もなく置てある其奥から、畫の日光に蒸された秣が乾いた明るい香を送り出すと、未だ暮殘る蜩が一つから〳〵と鳴いて居る。

不圖、小屋の中で人聲がするので爺ははつと足を停めた、別に足音を忍ばすといふではないが、斯る時に偶然の物音を聞く時には誰れしも自分を穩して見たいやうな氣がするもので。爺は窃と小屋の雨除に圍んだ黍殼の間から中を覗いて見た、途端に其の兩肩を搾めて棒の如く立悚んだ。

行火のれ福と乳搾りの鶴公が、秣の中に半分づゝ身體を埋めて互に抱合つて小聲に話して居たので。

一旦足を戻して、再び覗いた時には佐吾十は獵犬が手強き獲物を嗅ぎ當

てた様に、總身の慄ひを強て抑へて立て居たが、聽て急ぎ足ですた〳〵と引返した。

あ　佐吾十は茫然として家に入つた。

ん　いつもならば、黑光りの廣い板椽に、舶來の燈籠と名を付けた岐阜提燈を吊るして、行火の御酌で五勺ばかりの酒に胸まで赤くし、骨が粉になる

火　を二三度唄ふと、直ぐ横になる、同時に鼾が聞える、と其れをれ福が俵を扱ふやうに轉がして寢床の上に乘せると決まつて居るのだが。此夜はざつと飯を濟ました限り、何思つたか毎もの寢間の次の納戸へ、別に寢具を敷

がした。

早過る程早く寢たので、佐吾十は中々眠られない、臺所の炉邊ではれ福始め奴共――年期抱の奉公人――五六人が、笑ひまじりに話してゐる聲が

あ　耳を唆かす樣に聞えるので、聞くまいとすればする程、自分を嘲るかの如く耳に從く。爺は一寸舌打をして、

ん　「れ福よう」と呼掛けた、此れが聞えたかして話聲が急にひたと止むと、奥歯で殺してる樣な笑聲が、いかにも堪えきれぬといつた樣に互ひに目眴

火　してる光景が眼に浮ぶ。

「れ福よう」と再び呼んで見た。

「あい」と言て次の間に來た足音の方を向て、

「あんではあ騒がしいだ、皆なに寢てしまへと言へよ、汝もはあ寢て了へ

よ、ぐちや〳〵面白くもねえ事饒舌くるで、其んで朝寢しるだわに」

「ろんでも爺さん未だ八時だわよ」と襖越に言ふ。

「何？八時だあ？八時が七時でも用も無えだに油あ點してる事無えだよ」

あ「ろんだら寢りいすよ」

と何かぶつ〳〵言て行た樣子、爺も同じく何やら呟やいて、枕を引返し

んて又頭を着けた。臺所では、

「あゝ寢べいかよ」

火「二日分寢て置くだ」

「殿樣御機嫌が惡いでの」

「寢る程の程が無えだ」

など手ん手に當付がましく言て、氣の抜けた欠伸が交る〳〵に聞えると、

夜具を取り出す音がころ〳〵と、聽て疲れの眠るに早く、急に靜かになつて了つた、其靜かさに引込まれて爺も何時の間にかうと〳〵となつた。

あ不圖目が覺めて四邊を見廻した。いつもならば自分の左傍にれ福がぐつたりと柔かい胸を出して眞白い腕を自分の胸の邊りにかけ生體なく眠つて

ん居るので、爺は其手を握つて見たり口に當てたりしてる中にゆつくりとした樂しい思に再び眠に入るのだが、今ま急にれ福を隣室に追ひやつた事に

火氣が付くと其れが俄かに擽つたいやうな淋しさを覺える。月は恰も窓の方へ廻つて居る、格子の影ながら鮮やかに抛げ込む光りは、其處に積である絲枠や、繭外しの器械などの影をも冷たく枕元の疊に落す。と、暗い壁の方から蚊の聲が一つぷうんと聞える、

「うるせえ奴だ」と呟やいて怪と考へて居ると、蚊の聲が次第に耳元に近くなる、びしやりと掌で打つと手應がない、默つて居ると又來る、又打つ、又反れる、忌々しいといつたやうに爺は起上つて枕元の手燭に灯を點ける、

あ　で、其れを如何しやうといふでもなく其儘其處に置て扨て再び横になつたが、既う眠らうといつても中々眠られない、只だ顏がかつ〳〵と逆上せて

ん　來る。

何を考へるともなく爺は半時餘り、天井に瞳を据ゑて居たが、隣の室に

火　枕を更ゆるやうな音がしたので、暗がりで何かに逢つたやうにはッと驚いて其方を見向いた、

「れ福よう」と聲掛けると

「あいよ」と直ぐに返事をする、

「汝あ未だ眠ねいで居るだか、早く眠つて了はつしやい」と腹立たしく言ふ。

「眠よう思つても眠れねいだもの」

あ　「眠よう思つたら眠れねい事あねいだ、何にをうぢや〳〵と身體べい悶ゑてるだ」

ん　「爺さんもあんで眠ねねだし」

「何んでつて其んだら阿呆こくもので無ゑ、眠て了つしやい」と譯なしに

火　怒つて、ジリ〳〵と燃ゑ盡きた蠟燭をぷつと吐き出すやうに消して了つた、何處かで盆踊の音が遠く聞ゆる、はアはいといふ聲、手を拍つ足踏みをする、其れ等が自分を嘲けるやうに枕に響くので、

「腹あ減らしめが」と獨りで言つて眠らう〳〵と力めて見たが、只だ不思

あ

ん

火

識に胸が焦けつく自分が眠られずに居ると同じくれ福も目が覺めて居た、其れが恰も自分の意氣地なく悶へて居る始終の樣子を悉皆知られた樣な氣がするので益々刧が養ゐて來る。

すると、先刻の一つの蚊が又たぶうんとやつて來る、目をぱつちりと開いて見ると、蚊帳を釣つてない事に今更ら氣が付く、窓の月明りにがらりと廣々とした室の眞中に自分が一人丈け寢て居る其の姿が自分ながら何となく淋しく眺められた。

「れ福よう」と再び聲を懸けたが返事がない。

「れ福よ、汝あ淋しく無ゐかよ」といつても答がない。

「此處さ來ねゐかの、爺さんとこさ寢ねゐかの」

仍且默つて居る。

あ

ん

火

「眠つただかな」と手燭を點けて立上つて障子を明けた、と、れ福はふつくりと二重にくびれた頤を仰向けて枕からせり出した顏は一體に圓みを帶びて、小さな鼻、濃い眉毛、ふさ〳〵と柔かい產毛のやうな毛の生際に殘つて居る額、其れが何となく、あどけない趣を持て小黃を乳の上まで掛け、其上に兩手を載せて居る。すると其の枕元に座つて佐吾十は瞬もせずに寢顏を見詰めて居たが、堪ゐされぬといつたやうに、ぐつたりとしたれ福の手を取て、自分の顏につけて見て、はろ〳〵と涙をこぼした。

霎時其儘に身動もせずにあつたが、急に起上つて椽側の雨戸を繰りあけた。ほの〳〵と明けにかゝつた林檎畠は、木並の奥から白い薄明りを送つて、細雨まじりの霧が一面に深く立籠る、中に、草に落る林檎の音がはたり〳〵と重さうに聞ゐる。爺は草履を引掛けて外へ出た、じみ〳〵と肌に

染み込むやうな霧が眉に雫と落ちて顔に流れるのも拭はうとも思はず、一夜眠らずに勞れた老の身は、底に耳鳴りがする程逆上せて居るので、恰ら虚空を迷ふ扨売のやうに、畠中の路小路を當て度もなく廻つた。

あ　牛小屋の前へ來ると黒牛が苦しさうに泡を吹いて居たが、主人を見て、もう〳〵と二聲ばかり鳴いた、いつもならば、何とか聲を掛ける處だが爺

ん　は默つて此處を過ぎ、西の丘へ登ると、暮るゝにも急な此土地は明くるにも急で早や全く夜が明け放れたが、薄氣味の惡い霧は雨になりさうな空色

火　を濁して木といふ木は全で死んだやうにろよと動く葉もない。此處に暫らくの間物思に沈んだ爺は、例の竹螺を吹いて地福の下に來た頃は自分ながら疲れ切て居るのに氣が付いたので力なく花莫蓙の上に腰を下したが直ぐごろりと横になつた。

眼の覺めたのは彼是十一時近くであつた、日がぢり〳〵と顔を照らして頭の上では蟬が油を煮る樣に啼き出して居る。

「ほう〳〵」と氣短かに二三度續けて怒鳴つても逃げない、起き上つて石

あ　を拾ふと蟬は賢こくも飛んで行つたので其の寢覺めの不機嫌な顏を一層六つかしくして後を見ると與茂爺が何か言ひ度さうに腰を屈め佐吾十の顏色

ん　を伺ふ樣に立て居る。

「旦那眼が覺ましたけれの、あの黒牛が大變でゝすよ」

火　「如何しただ」

「眼う閉めて舌出しますだ」

「牛が舌出す？其れが不思議けれ」

「はあ平常と違ひますだて」

汝あ牛の係りだんべいに、舌出すも尻尾出すも俺が知た事けゑ」と怒く
の蟬に、
「何んてい八釜しいだ」と苦りきつて居る。いかさまにも只ならぬ
あ　　興茂爺は幾度も頭を下げて默つて立去たが、霎時すると又た戻つて言を細
めながら、
ん　「旦那さあ」
「何んだよ、汝も何年ちうもの牛飼つてるだよ」
「いんにや其話ぢやごつせんて、あの……」
火　「何んだか知んねゑが、今時分其んだ話し面倒臭ゑだよ」
「ちよつくらで宜いだが」
「早く言へよ」

「新太とれかよの事だあに、家建てべいに木柄見て呉せいよ」
「新太とれかよ」？と佐吾十は何か考へて、
「其んだ事聞きたく無ゑだ」とぶつと唾吐いて、鶏の羽を繋いだ烏除の縄
あ　をぐつと引張ると、鳴板がからく〳〵と奥の方で響く。傍を見ると興茂作が
もう居なくなつて居るので、何だか張合が無くなり向ふを見ると、興茂作
ん　が大きな土瓶を提げてはく〳〵行く姿が見ゑる。霎時其の後影を見詰めて
居たが、突然に大きな聲で、
「興茂作やあい」と呼んだ、呼ばれた興茂作は土瓶を木の根に置いて、神
火　妙に再び其の頭と腰と足との調子を取て前屈みにやつて來る。
「旦那呼ばれだけゑの」と頭を突出して主人の顏色を窺ふと、佐吾十は俄
かに慌てゝ、

「うむ呼んだがな、用いつても別に用でも無いだが、爾だ、あのう鶴公何してるだ」と横を向く。

「今の先刻まで秣あ切て居たが、何處さ行だか今見ねいだ」と與茂作が答へると、暫時默つて、

あ「汝あれ福知んねいかな」

ん「いんにや、今朝つから、から見ねやうだ尋ねて來べいか」と與茂作が言ても答がない、どんよりとした眼で地面の或一點を見詰めて居る其の顏色を、ちらりと見て與茂作は足音のせぬやうに此處を立去つた。

火日が眩い程に照て來る、蜩が次第に喧しくなる、與茂作は倉皇と逃げて行て了う、滅多に畫寢をした事のない自分が、午前丈けを眠つて了つたので、其間何だか怎う馬鹿にされて居たやうな氣持がして、見るもの聞くも

の悉くに當り散らしたいといつた風に腸の底から小焦躁たくなつて、煙管を吸うと火が消えて居る が、直ぐに燧石を打たうともせず、其儘に煙管を叩き直した。奥の方では元氣のいゝ女の聲で、

あ「姐子居たかと窓から見れば」と一人が唄ふと、

「親父あ横座で繩綯てるよう」

ん と一人か和する、白い手拭で頰冠りした後姿が、ぱくり〳〵と林檎を捫ぐ毎に搖れる木葉の隙から見ゆる。

火「沒意らねえ」

と舌打して爺は、其方を尻目に騷けて、反對の方を向くと、追駈ける樣に續て唄ひ始める。

「色の黑い奴情夫に持てばあ」といふと

「鴉見るたび思ひ出すよう」といふ、彼是三十分許も此那唄を聞くともなしに節は何か沈思へて居ると突然横合の木間から

「れ福樣居ねゐだよ」

あ　と興茂作が顔を出した。

「あんだ？」と向直ると

ん　「れ福樣目つからねゐだ、不亂に尋ねだが」

と興茂は小さくなつて居る。

「誰れが尋ねろと言つただ」といふ聲が穢張て居る。

火　「れ福樣知んねゐがつて聞かしやつたけゐに」

「聞いだは聞いだ、尋ねろと言つたで無ゐだ」

「はあれ、わりい事しただかな」と興茂作は謝罪る、佐吾十は益々澁い顔

して、

「用の無ゐもの何んで尋ねるだ」

「はあ、思ゐ違ゐしただ、はあ善く無え事しただ」と頻りに繰返してる中

あ　に佐吾十は何時の間にか默つて別な思に走つたので、双方顔ばかり見合つて居たが、

ん　「興茂作よ」といつた佐吾十の聲は劃然と優しくなつた。

「汝許に女娘あるだあな」

火　「あるだ」と興茂は急激の變化に驚きながらも直ぐに答へた。

「ありや何處かさ嫁にやつたかのう」といふ調子は平素と違はぬ。

「いんにや、やらねゐ、が、其事だてのう旦那、あの通りの御多福だで、若ゐ男あ構つて呉れせんし、本當によ旦那、嫁の口一つ懸つた事無ゐだ、

あゝいふ面に生れたのあ、わが身も没意らねしな、親の身から見ても無情くてなんねゐだ」と佐吾十の顔の雲行を見い〳〵、吻と息をついて、

「如何だ處でも若ゐ中に結縁べゐ思つてるだに、好きだ男引張て來る手腕も無ゐだし」と霎時言淀む、

あ

「好きだ男つて、汝あ其んだに男持たせ度ゐかや」といふ佐吾十の聲は餘程穏やかである。

ん

「苛ゐて見さつせい、若ゐ時にや、男の欲しいものたあ女娘で、女娘の欲しがるものあ若ゐ衆だによ、男はろんでも辛抱するだがの、女子は情は行かねゐだ、婿う欲い〳〵思つてでも、ろら、口にや言へ無ゐだし、嫁盛りが過ぎると氣が重くなつて身體が大儀になるだ、女子に男持たせるのは工の心棒に油あ塗ると同一事たて、誰だか知んねゐが能く言ふたもんでな」

火

「其れも其んだが、汝あ只た一人の女娘を外さ與れてやつたら、汝あ淋しかんべいよ」

「どうで淋しいだ、年老れば段々淋しくなるだ、揚句にや墓さ入るだから

あ

の、墓は一番淋しい處で無ゐかの、其んで物あ諦め樣だで、淋しいものだと決めて了つて、其代りにや子供に寸時も早く面白ゐ思させりや、死んでも後生が善いだ」

ん

「其うだのう」と佐吾十は何か考へて居る。

「其れを御前樣、自分あ淋しいからつて色氣付いた女娘を無理に引張て置

火

た日にや、女娘の方で男作ゐて親置いてとつ走るだ、其れよか早く男當てがつてやりや、こら程大丈夫な事あ無ゐだてのう、汝にした處が、汝の御蔭で、此村にや親不幸が一人も出た例が無ゐだ、あんでもはあ繭の蝶だ

樣に、くつ着いたら夫婦にして了うと、ろくい〜子が出來て種が取れるだよ」

「發明な事言ふたなと」佐吾十は初めて笑つた、興茂は猶ほ饒舌り續ける

「汝あもう忘れたんべいよ、が、俺あがでは女房があるでの、こんでも二人で昔の話などする時あるで、若い時の事忘れねいだ、あんでもはあ其時の事考いると、今女娘の事を何んだ彼だと叱言べひ言はれねい樣だ氣がするでハ、、、」と笑つたが、對手が再び曇つた顏になつたのを見て。

「どうら、黑牛もう一返見て來るべい」と逃げる樣に小足に急いで去た。

殘された佐吾十は再び口を尖らして伏目になつたが、不圖眼を擧げると、丁度一間許前の水の下にれ福が默つて立て居たのを見て、自分に薄暗い事でもあるかの如く非常な慌ぎ樣で、つと立上り

「汝あ何んで人の話を立聞してるだ」と腹立たしく言つた。

四五日の間、佐吾十は此那風に日を暮らした。近頃は滅多に彼の傍に近寄るものもない、畠のものは皆な黑牛が死だから機嫌が惡いのだといふて居る、で、其の弔詞を言ふものがあると、鈴は苦りきつた顏で

「生物だあにや死ぬ時もあるべいや」と素氣なく言ふ。

或日鈴は氣分が惡いといふて一日朝から室に引籠つて居た、此んな時にはいつもれ福を呼び通しに呼ぶのだが、此日はれ福をも室の中へ入れぬ事にして、食事の時だけ、茫然と出ては飯を白湯で掻き込み、其れが濟むと

直ぐに引込んで物思に沈で居た。

夕飯時になると、爺は何となく氣持よさゝうに庭を逍遥して居たが軈て

あ　與茂爺を居間に呼んで長い間しんめりと話をした。

其翌日此村中で肝を潰す樣な話が與茂爺の口から他の口口へと傳へられ

た、其れは行火のれ福と鶴吉の祝言の事で、與茂爺は飛んで廻はつて村中

ん　の人を集め、早朝から家普請に取掛つた、一軒は新太と御かよの家で、一

軒は鶴吉夫婦の家。

火　地均しをする、石を据ゑる、材木を組む、壁を塗る、百姓は大工の業に

も慣れたもので二三日の間に家が出來上つた、壁が未だ乾かないといふに

性急の佐吾十は、其まで待て居られぬといふので、急に建具、疊やら大騒

ぎをやつて漸やくの事に此に引移るまでになつた。

庭の柿の木の下に荷車が二輛、轅に酒樽の鼻をした一輛は、戸棚、手桶

大盥小盥、臺所道具を積んで、今出る許りにして居る、一輛は丁度四五人

でがやがや言ひながら椽側から持ち出す黑塗の箪笥、同じ色の長持、其れ

あ　を積ふと罵り噪いで居る背後かち、指圖がましく聲掛けて居るのもある。

「ほら出たぞ〳〵」

ん　「あんてい重ていだ、どつさり這入つてるべい」

「どつさり入這つてるべい、ろらどつこい、こ〳〵らだ」

火　「うんにや、もう寸尺左さ推せやい」

「右さ引けやい」

「上が明いてるだ」

「行燈を乘つけるべいよ」と一人がいへば

「針箱がある筈だ」と一人がうろ〳〵して居る。
「もう些と乘つけでもい〳〵によ」と梶へ廻つた男が、一寸上げて見て言ふ。
「もう何にも無ねだ」
あ　「行火ぁ乘つけるべいかよ」と誰やらがいふと
「は〳〵〳〵違ねねだ」と一同が笑ひ出して柿の木の方を見ると、佐吾十
ん　が其處に莞爾ともせずに立て居たので、申合した樣に顏を見合せて口を噤
んで了つた。
火　「旦那御目出度うです」と大勢の中から與茂爺が鉢卷を脱て前へ出ると
「皆なが御苦勞だの」と佐吾十は人に顏を見られるのが蒼蠅いといつたや
うに■を反向ける
「あんでもはぁ、急なこんだで、旦那、村の者もはぁ、吃驚しましたど、

旦那淋しかんべいに、よくはぁ大事の行火手放したつての、皆なで言つて
ますではぁ」と佐吾十の傍に進み寄る
「村の者ぁ爾言てだかな」
あ　「へね、皆んなで喜でな、恁那目出度ね事ぁ無ねだに」
「鶴公何んと言てだよ」と佐吾十は妙に言葉尻を力なく言ふと、與茂は足
ん　の先で石を搔き寄せながら
「何んて言てるつて御前樣、神樣だぁ樣に難有ねて言てるだぁよ」
「爾か」と、ふいと畠の方へ行て了ふ。——
火　途端に鶴吉とれ福の二人が高笑しながら來るのに碓と出逢つたので、鈴
は一方ならず慌てて立止まつた。
二人とも引越しの埃によごれて、鶴吉は襯衣一枚に半股引、れ福はかちん

の上つ張を着て眞白な手拭で髪を包んで居るが、色の白い丈けに耳際から襟元まで今更らのやうに美くしく見ゆる。

「汝わはあ行くだわかな」と自分の前に御辭儀をする二人を、熟々と見下して爺は言つた。

あ「はあいろ〳〵御世話樣になりましたで、あんともはあ」と鶴吉は眼をうるませながら畏こまると

ん「爺さん、ろんでは御暇するだよ」とれ福は未だに狎へる樣な調子で、一寸會釋した。爺は態とらしく快活に笑つて

火「ろんだら仲よく暮らせよう鶴公、れ福可愛がつてやつてくれろよ」と霎時默つて

「れ福、汝あ嬉しかんべいのう」と言て、俯向きながら互に顔を見合はせ

ては耻かしさうに笑つて居る二人の上から直ぐ眼を反らし、

「うむ嬉しかんべい」と再び繰り返して

「ろんだらはあ行けよ」と瞳も動かさず何かに見惚れてるやうな目をしながら惜乎といふ

あ「ろんだら旦那」

ん「爺さん……」と二人は辭儀をして庭の方へ廻つた、返事もせずに爺は其後影を怪と見送つて居たが急に

火「れ福よう」と呼止めた

「あいよ」と氣輕に答へて振向くと、何やら口を動かし度さうにして、俄かに思い返したといふ風に

「い〳〵よ、もう行けよう」と手で推しやる樣にして直ぐと後ろ向いて了つ

た。

が、直ぐと又、足を返して二人の出た方へ來て見ると、既に影もない、無格好にによき〳〵と立て居る柿の大木二三本、其下の土は日當りが悪いので薄い苔を見るやうにじみ〳〵と濕つて居る、其上に酒樽やら、石臼やら、木屑藁きれ、菰きれ、其那ものが他隈なく散らかつて、今までの賑やかさに引かへて大風の後の樣にがらりと淋しく、夕暮近い何處かの隅で、思ひ出したやうに鳴き合はす虫の聲々が際立て聞ゆる。

と鈴は茫然と薄闇の空を見詰めながら、がつかりと樣に腰を落し、今まで禍の鎧筒や小道具を置いてあつた壁の隅を見廻して又茫然と

「嬉しかんべいの」といつて獨り淋しさうに唇を結んだ。

あ

ん

火

其翌日から佐吾十鈴の姿が畠に見ない、朝夕の竹法螺も聞ない、牛や馬や梨や葡萄や林檎にものいふ人もなく、地福の下でのべつに人を呼んでる其聲もなくなつた。其代りに畠の隅々では無遠慮に唄つたり笑つたりする聲が陽氣に起つた、が、其れが底に力のないといつた樣な賑やかさで、畠の中は丁度秋の空の晴れ〳〵とした中に心細い氣の冷えが含である樣に、一體に張合の抜けたやうな淋しさが籠つて來た。

一日二日三日、四五日といふもの、佐吾十は寸時も居間の外へ出た事がない。すると七日目の夜の事である。

牛番の與茂作が一廻り畠を見廻つて家に入つたのは彼れ是れ十二時頃、

空は一點の曇もなく胸の底に冷たく浸入るやうな星月夜で、其れがろよと木の葉を動かす風もなき恐ろしい沈默の此の林檎園を謎のやうに濕つぽく照らして居る

あ　「あんと云ふ靜かな晩だべいよ」と與茂作は獨りで言て戸を閉めた。

　　不意の物音に眼をさました與茂作は、寢床を跳ね起ると、外は何時の間

ん　にか洪水の樣な風の音

　　「やあ大風が來たな」と窓から空を窺いて見ると只一面の灰色、朧の中に

火　萬樹の推し合ひ揉み合ふ影が、丁度七月の眞昼に動く夕立の雲の如く眞黑

　　に上下に猛り狂ふ

　　物に慣れた爺は直ぐと腰に鉈、六尺棒を取て外に出た。

　　「火の用心〳〵大風が出るだに用心さつしやい」と皺嗄れた聲で村中を呼

はつて、眞直に畠の方へ駈け出した。

　　山が少なく高い處といつては遠くに起伏する一帶の丘陵ばかりで、西は

　　日本海、東は八甲田の麓まで十何里といふ間は、見る限りなき平原を、死

あ　の色といつた樣な灰色の雲が暗く間に一切れの隙もなく頭を壓へ付ける樣

　　に天を塞いで了ふと、ぶうと底に力のない樣に生暖かい風が吹き出す

ん　「やあ風が變つたゞ、ろうら變つたゞ」と與茂作は狂氣の如く叫んで、倒

　　れまいと腰を屈めた。

火　「誰だわよ、與茂作爺けゑ」と息を窘ましながら薄暗から聲をかけるもの

　　がある。

　　「れう鶴公けゑ、酷あ事になつたゞ」と立止る、鶴公は漸と追着いたが二

　　人は何も言はずに向方を見た。

夜明には間がない。風は今出盛りである。ごうつといふ聲と共に何處やらで木の裂ける音、棚の落る音がすると、ひた推しに一方に推し伏せられた見る限りの林檎樹が黄色い斑を帶びた百千の猛獸の如く其枝葉の鬣を捩ぢ上げられて、反對の方に逆さに捩ぢ戻さるゝ、途端に村の方で、竹法螺の音、男女の叫びが起つた。

あ

「爺さんは如何したゝかな」と鶴吉が思ひ出した樣にいふと

ん

「今に來るべいか、はあ、あんて遲ゑ事た」と與茂作は刻一刻に揉まれ行く畠物の光景を手の付けやうもないといつた樣に眺めたが、物に刺された樣に飛び上つた。今迄向ふの野中の大沼がどぶり〳〵と波打つて居たが、其れがどしいんと云ふ堤の切れ出した樣な音がすると、奥の地福林檎の邊りで何かばり〳〵と壞れたので。二人は一生懸命に駈け出した。

火

夜が明けた、天地は只明るい、物凄く明るい、絶望の色の下に戰つて居る生物の奮鬪の光景が眼前に見られる。其れは此土地で惡魔よりも恐ろしいといつて居る南の生暖い風で、之に吹かれると口も喉も埃に乾くやう、顔が燃ゑるやうに逆上せる、畠物は堪つたものでない、其れが又、枝摺れ葉摺れの爲めに熱氣を起して葉と云ふ葉は燒かれた樣に爛れて赤黑く錆びて了ふ。恁ういふ日に限つて一滴の雨も持たないので。

あ

ん

二人が家の裏口まで來た時に、れ福も駈けつけた、家の奴共は無論起きて居た、村の者は手ん手に、棒、熊手、梯子、などを持て走せ集つた。

火

風は益々吹きつのる、木葉、木屑、板片、屋根の柾がばら〳〵と勢よく飛び散る

「家根さ上れやい、家根さ」と與茂が叫ぶと、氣の利いた若者四五人はた

はたと家根に上つて吹き落されまいと佝僂ひながら何かへ蒜と攫つた。

「梯子を立てろと」再び與茂が叫んだ

庭の大きな柿の木二本其れに二本の梯子を立てし、風の向きに枝を支へて蒜々と繩で縛つた、其れが吹き寄する度毎に梯子の足がぎりつ〳〵と土を嚙んで竹の如く撓へられる、一同は只ならぬ顏色に其れを見て居る。

あ

と、家の中から

ん

「爺さま居ねえだ、爺さまが」とれ福が叫ぶ聲がする。何といふ事なしに

火

與茂作と鶴吉は納戸から駈け上つた。佐吾十の居間へ入つて見ると椽側の雨戸が一枚明けてあるので、其處から吹き入る風は蚊帳の裾を天井まで高く吹き上げて、主人のなき蒲團と枕とを冷やかに見せる。

「旦那やあい」

「爺さまやあい」と叫んだが其聲が直ぐと風の爲めに室の中へ吹き返へされて、其れが三人の胸に只事でないといつた樣な或る恐怖を與へた。

思ひついた事があるので、三人は地福林檎の下へ駈け付けた。二十餘年の風雨と戰つて今にも其の若々しい色を誇つて居た大林檎は無殘にも其の眞中の幹の岐れ目から眞直に根元まで裂けて、美くしい木肌を露はし、巨浪の如く壘まつた枝葉を兩方に拋げ出したまゝ、例令ば獅子の屍の大寂莫を以て猛り吼ゆる嵐の吹き弄るまゝに任せて居る、其の一方の枝に腰掛けて、佐吾十は殆んと魁入られたかの如く、裂目の木地を見詰めて居た。

あ

ん

火

「旦那樣よ」と與茂作が言ても答がない。

「爺さま」とれ福と鶴吉が代り〳〵に呼んでも身動きもせぬ

二十日許前の佐吾爺とは打て變つて、頰が瘠けて口元淋しく、がつかり

と肉の落ちた横顔の額際の一段と稜立て見ゑる處に鬢からかけて疎らに搦んだ白髪は、又となき衰弱を現はして居る。

「爺さま」と再びれ福は呼びかけて、其の膝の上に手を置き、覗くやうにして下から顔を見上げた、と、佐吾十は突然其手を確乎と握つて瞬きもせずれ福の顔を見下し。

「れ福か」と夢の様に小さな聲で言たが、はつと氣が付いた様に

「れ福か」と再び大きな聲に呼び直し、ずつとれ福の身體を膝の上に抱き寄せて

「れ福よう、汝あもう歸る事なら無ゐず、爺さまはな、爺さまはな」と言て再び石の如く默つて了つた。

（完）

258
305

明治四十一年二月十九日印刷
明治四十一年二月二十二日發行

不許複製

著作者　佐藤紅緑
發行者　東京市京橋區銀座二丁目九番地　服部國太郎
印刷者　東京市日本橋區通一丁目十九番地　村田豐吉
印刷所　東京市京橋區新榮町五丁目七番地　大倉印刷所
發行所　東京市京橋區銀座二丁目九番地　服部書店
賣捌所　東京市日本橋區通一丁目十九番地　大倉書店

L2

2 3

あん火

佐藤 紅緑

国立国会図書館

092832-000-1

特52-343

あん火

佐藤　紅緑／著

M41

DBQ-0122